

平成 19 年度
入学試験問題

国 語

2 月 1 日 午前

受験番号	氏 名

中村中学校

□ 次の(1)～(10)の——線部のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みを答えて下さい。

- (1) 雪のため決勝戦はエンキになった。
- (2) 病気がカイホウにむかう。
- (3) 国家間のキョウリヨクがかかせない。
- (4) チームを優勝にミチビク。
- (5) 図書館でたくさんの本をカリる。
- (6) 身の回りを清潔に保つ。
- (7) 自転車で日本列島を縦断する。
- (8) 氷山の一角にすぎない。
- (9) 兄は銀行に就職した。
- (10) トラクターで農地を耕す。

□ 次の□に入る最も適当な語を後から選び、記号で答えて下さい。ただし同

じ記号は一度しか使えません。

- 1 □ だけ言ったのにまた同じ失敗をしたのですね。
- 2 □ ほどこまでおっしゃるのなら、お願いしましょう。
- 3 □ には深い事情があるのです。
- 4 □ これ一時間になりましたでしょうか。
- 5 □ をと言われても、返事に迷ってしまいます。

ア、どれ イ、かれ ウ、それ エ、これ オ、あれ カ、われ

③ 次の文章を読んで、後の問いに答えて下さい。

いまや冬期の動物園の風物詩になった観のある「ペンギンの散歩」。雪が積もるころになると、十羽わ前後のキングペンギンが、ペンギん館から外に出て散歩を始める。すると沿道には、ペンギンの散歩を見たさに、人が集まってくる。みな通路の脇わきに陣取り、「I」をつくっている。ペンギンの一団が近づいてくると、子どもたちは歓声かんせいを上げて、走り回ったり、大人は携帯電話けいたいのカメラやデジタルカメラのシャッターを切っている。(A)

これは冬期の動物園の人気企画きかくとなったが、飼育係が「冬の大イベントにしてやろう」とか、「奇きをてらった企画を考えよう」とかして始まったものではない。日頃ひごろのちよつとした観察と知識、そして、何よりもペンギンのために始めたものなのだ。(B)

もともとキングペンギンは歩くことが好きなペンギンだ。特に冬場は泳ぐ時間が短いので、運動不足となり、太りすぎてしまうので、雪が降ったら、広場を歩かせてやろうと運動場に扉とびらを用意していた。初めの頃は入園者が帰ってから外に出していたのだが、とにかく散歩したがるので、少人数のときに出してみたが、ペンギンたちは人間をまったく気にせず、堂々と歩いているし、入園者もマナーを守りとても喜んでた。(C)

そのうち、開園時間になると、出してくれと言わんばかりに、扉のところに集まり、開くのを待つようになった。それならと、出したところ、入園者が通る道を歩き始めたのである。(D)

だから、ペンギンの散歩というのは、ショーのために、ペンギンを無理やり外におびき出したわけではない。あくまでもペンギンが歩きたいという態度を示したから力を貸し、楽しそうだから歩かせている。実は散歩したいペンギンのほうが多く、われ先に出ようとしているのだ。

動物園の展示方法を考える場合、私たちがいつも念頭に置いているのは、動物の側に立って考えることである。

人気があざらし館に關してもそうだ。

透明の円柱トンネルの中を気持ちよさそうに泳ぐアザラシを見た入園者から、私たちがときどき受ける質問に次のようなものがある。

「あのマリンウェイ（円柱トンネル）の中を通るように、どうやってアザラシをおびき寄せているのですか？」

大きな水槽に通された円柱の中を、なぜわざわざアザラシが通るのかと、不思議に思うのだろう。

a、一般の人ならば、そうした疑問を持つのも仕方のないことだ。

b

驚かされるのが、質問をする人の中に、水族館関係者も含まれていることだ。

ふつう、専門家ならば、展示を見て、「なるほど、動物のあの習性があるからマリンウェイを通るんだな」とピンと来るはずだ。しかしその同業者はそうではなかった。

c、なぜ、アザラシはマリンウェイの中を通るのだろう。

アザラシは、とても好奇心の強い動物で、マリンウェイ越しに人間が見えたと寄ってくるのである。d 見に来る客が多いと、マリンウェイを通るアザラシの数は多くなるし、飽きると、また通らなくなる。ネコに猫じゃらしがあるように、アザラシにとっての「猫じゃらし」を人間がしているわけだ。

これは動物園の職員しか知らないことだが、閉園時間や、閉園の時間後に、誰も入園者がいないあざらし館に行くと、人恋しいのか、アザラシが寄ってくることもある。それと、アザラシはもともとエサである魚を追うために、岩礁を猛スピードで駆けめぐっている。その習性がマリンウェイの中でも発揮されるのだと思う。

ホッキョクグマが、水槽に向かって飛び込むのも、アザラシと似ていて、透明ガラスで仕切られた水槽の向こうにいる人間の頭が妙に気になるから、ダイビングしてくる。ここにも、^②「猫じゃらし」の発想が生かされている。

あざらし館もほつきよくぐま館も、人間が猫じゃらしになる角度にということ
は、それだけ、はくりよく迫力のある動物の動きを味わえるということの意味する。設計をする
場合、どうしてもⅡの立場でしてしまおうが、「動物の視点」という、もう一つの
視点をくわえて設計したことが、新しい見せ方につながったのだ。

動物の視点といえ、リスの展示にも言える。リスがいるケージには、おく奥行きを
なりとっている。だから見る人に見れば、見づらいかもしれない。しかし、リス
が人間を危険と感じる距離きょりではストレスがたまるので、リスが安全だと感じる距離を
ケージの奥行きにとっているわけだ。見方を変えれば、あの奥行きがあるから、人間
が近寄っても、リスは見える距離まで姿を現すとも言える。

ただ、失敗もあることを付け加えておく。それは「くもざる・かぴばら館」での出
来事だ。

事故は二〇〇五年八月二十九日に起きた。カピバラのオスがクモザルのオスと水中
で闘争とうそうとなり、クモザルがカピバラの鋭い歯すもとで噛みつかれた。

懸命けんめいの治療ちりょうを施ほどこしたのだが、その甲斐かいなく、死亡した。輸血ちゆうけつさえ間に合っていれば
助かった命なのだが、残念な結果になった。

クモザルとカピバラは、同じ中南米に生息する動物だ。カピバラの生活するエリア
は地表。そして何かあれば水の中に逃にげる。一方のクモザルの生活エリアは本来、樹
上である。尻尾しっぽを木に巻き付けるのが上手なので、ほとんどを樹上で暮らしている。
だから、本来は地面に降りてくる生き物ではないのである。両者は生活エリア（ニッ
チ）が違ちがう動物同士なのだから、ケンカなどするはずがないというのが、われわれの
予測だった。

こちらに読み違えがあったとすれば、クモザルが、代々動物園生まれだったとい
うことだ。だから野生の有り様がわかっていなかった。地面は危険だという認識が足り
なかったのだ。もし野生のクモザルならば、あの事故は起きなかったはずだ。

カピバラは本来、草食動物だから、基本的に動物を襲おそうために噛みつくことはない。

しかし、身の危険を感じたときなどは、例外的に噛みつくことはある。

カピバラの占有せんゆうしているニツチに侵入しんにゅうしてきたクモザルが不注意だったのだ。あの場合、クモザルはカピバラが、近づいてきた時点で、樹上に上がるべきだった。ところが何を思ったか、クモザルがカピバラにかかっていった。当然、カピバラのニツチである水中では、クモザルがかなうはずがない。それで死に至る重傷を負ったというわけだ。担当の飼育係も、クモザルのオスがカピバラの力量を過小評価していたことは確かだと言っていた。

クモザルが死んだのに呑気のんきなことを言っているとされるかもしれないが、動物園③ですっと生まれ育っているクモザルが、あのような野生の法則に反した行動を取ってしまったことは、人間に対する警鐘けいしょうだと思っている。つまり、動物園のような場所で一種だけで暮らしていたら、自分の特性も分も、ほかの動物の素晴らしさもわからなくなってしまう。とても危険な状態だ。

今回の事故後、カピバラには何の変化もないけれど、クモザルは、あの事件でどうやらカピバラというものが分かったのか、あれ以来、絶対に降りて来なくなったので、事故はない。

このように異種の動物を同居させることを、「共生展示」というが、今後④もやめるつもりはない。

この展示方法は、くもざる・かぴばら館が初めてではない。ゾウとペリカン※は定着して、いままも共生展示されている。私は以前、キリンとホロホロチョウの共生展示を試み、失敗してしまったことがある。野生のキタキツネが園内に侵入し、ホロホロチョウをすべて持ち去ってしまったのだ。その後もチンパンジーとホロホロチョウの共生展示を計画しているが、未だに成功していない。

「日本一になるためには、何をやってもいいのか」というような批判があったが、私たちが目的があってやっている。

一つは、飼育をする環境かんきょうで生活が単調にならないようにするための工夫くふうである。異

種ということ、刺激もあるし、それが彼らにとって豊かな時間となるからだ。

二つめは、自然の姿を見せたいという思いがあるからだ。

偉大な学者にして偉大な探検家・登山家である今西錦司。彼が「今西進化論」の中で言っているのは、生物は、戦って戦って居場所を決めるのではなく、自ずからあるようにある。これこそが自然なのだ。そのように自分の居場所を定めるのだ、ということである。そして、空いたところができたら、そこに違う種が入っていく。そういうふうにして生態的地位（ニッチ）は形成されるとも言った。きわめて東洋的である。

※
ダーウインのように、争って争って、優位なものがそこに定着するという考え方に対する強烈な批判になっている。

（小菅正夫「旭山動物園」革命」

※奇をてらった……一風変わったことをしてみせること。

※ケージ……おり。

※ホロホロチョウ……キジ目ホロホロチョウ科の鳥。

※ダーウイン……イギリスの生物学者。「進化論」を唱えた。

問一 I に当てはまる言葉を次のア～エから選び、記号で答えて下さい。

ア、あぜ道

イ、並木道

ウ、けもの道

エ、花道

問二 次の一文は本文中の（A）～（D）のどこかに入るものです。入れるのに最も
適当な場所を記号で選び、答えて下さい。

それが「ペンギンの散歩」のそもそもの始まりだ。

問三 —— 線①について、この具体例として正しくないものを次のア～エから一つ

選び、記号で答えて下さい。

ア、握力あくりよくと好奇心あきんしんの強さを活かし、オランウータンが人間の頭上にはられたロー
プをわたる「空中散歩」。

イ、鳥たちが悠々と飛ぶことができる巨大な鳥かごを作り、人間たちがその中に
入るようにした「ととりの村」。

ウ、おりの中に人間が入って自由に動物を抱いたり、えさをあげたりすることができる
「こども牧場」。

エ、ヒヨウが樹上で寝る性質を活かし、人間の頭上で堂々と寝られるようにした
「もうじゅう館」。

問四

a

d

 に入る言葉を次のア～オから選び、それぞれ記号で答えて下さい。

- ア、しかし イ、だから ウ、まるで
エ、では オ、もちろん

問五 —— 線② 「猫じゃらしの発想」とはどのようなものですか。最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えて下さい。

- ア、人間が動物の好奇心を満たす対象となる発想
イ、人間が動物を飼い慣らそうとする発想
ウ、動物をエサで誘^{さそ}おうとする発想
エ、動物の好きなものを探し出そうとする発想

問六

Ⅱ

 に当てはまる言葉を本文中からぬき出して、一語で答えて下さい。

問七 —— 線③とありますが、このクモザルがそのような行動をとってしまった理由を、本文中の言葉を用いて説明して下さい。

問八 —— 線④とありますが、「共生展示」をやめないのはなぜですか。次にあげる言葉を必ず用いて、理由を二つ答えて下さい。

- 一つめの理由 単調 刺激
二つめの理由 自然 居場所

四 次の文章を読んで、後の問いに答えて下さい。

最低の日だった。

すきなキックベースは雨で中止になった。授業中、ユカちゃんに話しかけられたのにミオが注意され、しゅうきんぶくろ集金袋にママはお金を入れわすれた。体育でひざをすりむき、保健室でつけられたクスリは 1 しみるやつだった。

「五年生にもなって、よくケガをするわね」

保健室の先生があきれたようにいう。

「でもケガをしても、カサブタができるでしょ。ヒトってすごいよね、キズをちゃんとなおしてくれる」

先生はカットバンをはった。

「だからカサブタ、はがしちゃだめ。はがすから、ほら、こんなになっちゃうのよ」
ミオのひざごぞうを指さした。ひざの古い傷はクレーターのようになへこんでペカペカと光っていた。

でも、最低の日にとどめをさしたのは、ユカちゃんとのけんか。最初はふざけ半分のいい合いだった。

それが 2 声が大きくなり敵が多くなり、しまいにはクラスの女子せんぶを相手にしていた。けんかはやめなよと、とめに入ってくれたみなみちゃんにまでいい子ぶらないですよ、とどなってしまった。

みなみちゃんがなみだ涙ぐむのを見たとき、ミオも泣くかもしれないと思ったけれどがまんした。がまんできたついでに舌まで出してみせた。

きょうは最強のラッキーデイ。天使があなたの味方です。なんて、朝に見た星うらないは 3 当たってないや。ミオは雨にしおしおとぬれながら家に帰った。

家にはだれもいなかった。

タオルで髪をぬぐいながら、テーブルの上のメモに目をやった。メモの一番終わりには、ちっとも似てないママの似顔がわらっている。

「おかえり。急用があつてでかけます。六時には帰ります。おやつはとだなです。ママより」

① ママの頭に不気味な触角がついているのに気づきミオはあわてた。ママはそんなふうに自分を描かない。瞳に星をいれ背中には花を背おわせる。触角はヒナコのしわざにちがいがなかった。ミオはあせって台所にとびこんで戸棚をあけた。中に 4 ポテチもチョコもなかった。酢こんぶはにおいだけがのこされていた。

ヒナコをぶつのはごはんの前にしようと心にきめて冷蔵庫をあけた。

冷蔵庫の中にあるのは、少しばかりのオレンジジュースと、500ml 缶のコーラだけだった。炭酸飲料はのみきれない場合、あけてはいけないきまりになっている。

ミオはわずかばかりのジュースをのみほし、空のボトルをつぶして捨てた。おやつはまるでないし、ジュースはあっても足りなくて、コーラは多すぎてのめないのだ。きょうはついてない。ソファーにうつぶせにたおれこんだ。

まったく呪われた水曜日。水曜日？ そうだった、とミオははねおきた。

水曜日はミオの塾もないし、みなみちゃんの塾もピアノも合気道もない。必ずいっしょに遊ぼうとやくそくしている日だったのだ。

みなみちゃんに電話をかけた。会って、ごめんねというつもりだった。

電話ではみなみちゃんに先にごめんね、といわれた。あたし、きょうは用事があつて遊べないの、ごめんね。

みなみちゃんのそばにだれかのおしころした声がききとれ、ユカちゃんの声だとすぐにわかった。

ミオは、ぜんぜん、といった。あたしもほんとは用事があつたからちようどよかった。バイバイ。

バイバイといったあとも、ミオはしばらく受話器を耳にあてていた。ツーツーとい

う音が耳に残った。

家の中がきゆうに静まりかえり、雨のふる音だけが大きくなった。

ひざをかかえてミオはうずくまった。ひざこぞうのカットバンが目についた。ピリリととった。血がかたまっていたので、こんどはそれをはがした。みなみちゃんはあたしをきらいになったんだ。とうぜんだよ。

② キズをいじつちやいけないといわれたけれど、しるもんか。カサブタははがしてやろう。できてもできてもはぎとってやろう。

〈中略〉

傘^{かさ}をもって家を出たとたん雨はあがった。おんぼろの車はミオをねらって排気^{はいき}ガスをふきかけ、太った園児はミオを見るなり水たまりに着地してどろ水をあびせた。バスからおりた人の群れが歩道の正面からぶつかってきた。そこまでする？ 人々にこづきまわされながら、ミオにはわかった。

世の中はよってたかって自分ひとりにいじわるをしかけてきている。なぜかはしらないけれど、運命の女神^{めがみ}はミオをにくみ、ろくでもない人々をけしかけてはひどい目にあわせたがっているのだ。

目の前を、自転車をひいた人が横ぎった。そのときうしろの荷台にのせてあった傘がポロリと落ちるのが見えた。小さなおりたたみ傘だった。

自転車のおにいさんはそれには気づかず、行きすぎようとしている。ミオは思わずひろいあげ、あとを追った。

「すみません」

ミオはうしろすがたに声をかけた。でもおにいさんはふりかえらない。

「すみません」

もう一度大きな声を出した。道を行く人たちはなにごとかとミオに注目するのに、かんじんのその人だけがふりかえらない。きこえないはずがなかった。わざと無視しているとしたか考えられなかった。

ミオは心をきめた。世界がどんな悪意をもつていようとかまわない。その手にはのらない。クールでいく。

追いかけていってうでをつつき、どなるようにいった。

「カサ、おとしましたっ」

おにいさんはやつとふりむいた。神経質そうな目が前髪のあいだからのぞいた。背が高かったので見おろされたかっこうになった。

ミオはにらみつけて向き合い、それから果たし状でも渡す^{わた}ようにおにいさんの手に傘をおしつけ、クルリと背中を向けた。

肩^{かた}をそびやかしてミオは進んだ。ひざこぞうの傷がピリピリと痛んだけれど、ずっと大またで歩いた。

あたしはまけない。ぜったい泣かない。

だれかに肩をつつかれた。

ふりむくと傘を渡したおにいさんだった。おにいさんはミオに向かってしきりに手ぶりをして見せた。

それでやつと事情がのみこめた。その人は I。だからミオのよびかける声もわからなかったのだ。

おにいさんはミオの手をそつととつた。そして手相でも見るように手の平を上に向けた。そこにおにいさんは指でなぞつて字を書いた。ゆっくりと書いた。くすぐったかったけれどがまんした。とてもかんたんな字だったから、すぐに読みとれた。

ありがとう

ミオは顔を上げた。

どんよりとした雨雲がきれ、太陽は西の空にかがやいた。風はやみ、みかん色の陽がおだやかに町を照らした。とりのこされた水滴^{すいてき}があちらこちらで光を散らした。

こういうことってあるんだな。ちいさなことで奇跡^{きせき}のように世界が変わること。^④ほえもうとしたミオはどうしたわけかうまくいかず、はんたいにベソをかいてしまった。

おにいさんはミオの顔をのぞきこみ、こまった顔で首をかしげた。それからミオの手を自分の両手でつつみこみ、あやすように上下にふった。

ヒトつてすごいよね、キズをおおってなおしてくれるものがちゃんとあらわれるんだから。だからカサブタ、とっちゃダメ。

保健室の先生はどうしてわかったんだろう。

あした学校でみなみちゃんにあやまろう。集金袋は自分でたしかめよう。ヒナコをぶつのは先にのばそう。

ミオはペコリと頭を下げた。おにいさんはほっとしたようにほほえんだ。ミオは歩きだした。

II

星うらないを思い出して、しばらく歩いたところでおにいさんをふりかえった。自転車をひいている背中を見ると、服が少しだけもりあがっているような気がした。ちょうどたたんだ羽くらしいの厚さに。

(安東みさえ「天のシーソー」より「ラッキーデイ」)

問一 1 4 に当てはまることばを次から選び、記号で答えて下さい。

ア、ちつとも イ、すでに ウ、だんだん エ、とびきり

問二 —— 線①とありますが、なぜミオはあわてたのですか。理由を答えて下さい。

問三 —— 線②とありますが、この時のミオの状態として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えて下さい。

ア、自分がしたことが悪かったと、反省している。

イ、ついていないことばかりで、投げやりになっている。

ウ、嫌いな子に友だちを取られ、悔しがっている。

エ、悲しいことがいっぱい、泣き出しそうになっている。

問四 —— 線③とありますが、どのようなことを心に決めたのですか。本文中のことばを用いて、具体的に答えて下さい。

問五 Ⅰ にはどのような内容のことばが書かれていたと思いますか。前後をよく読んで、答えて下さい。

問六 —— 線④とありますが、なぜ「ベソをかいてしまった」のですか。説明して下さい。

問七 Ⅱ に入るひと続きの二文を本文中からぬき出して下さい。

問八 ミオの気持ちの変化を情景にのせて表している部分を探し、初めと終わりの五字ずつを答えて下さい。(句読点を含みます)